特集

盛岡での再出発に思う。

～東日本大震災から1年～

震災で店舗や工場を失った方々の選択は様々。その中で故郷に思いを残しながらも移転した盛岡で再出発をした2組の事業主さんに「今思うこと」をお話いただきました。

■赤武酒造㈱／大槌町の地酒「浜娘」をつくる明治29年創業の酒蔵。その5代目として蔵を守ってきた古舘さんは、震災によって商品や工場、自宅も全て流出し従業員一人が亡くなった。古舘さんは家族と共に盛岡に移住し再出発をした。
岩手県盛岡市飯岡新田1-27-3 A-1　TEL.019-681-8895

一度はあきらめた酒づくり。周囲の後押しで再開！

「赤武酒造株式会社」
代表取締役　古舘秀峰さん

震災によって蔵も家も流されましたから、最初は「もう酒蔵なんてできるはずがない」と諦めていました。しかし、取引先に挨拶回りをする中で「またやらないのか」とか「酒蔵を再開するならパックアップするから」と励ましの声をいただき、もう一度酒づくりをやってみようと思ったのです。それまで雇用していた従業員は大槌で再スタートを切っていたため、盛岡市のガイダンスで新たに従業員2名を雇用。以前から交流のあった岩手県工業技術センターの紹介で盛岡市新事業創出支援センターに入居し、8月から酒類製造を開始しました。

まずは、5年程前からつくり始めて人気が高まっていたリカースイーツの製造をスタート。私の頭の中に残るレシピを頼りに3種類の味をつくりました。新しいスタッフと共に出荷前から広報活動を進めていたおかげで、盛岡では多くのお客様に買っていただいています。

でも…、どうしても日本酒がつくりたかった。8月頃からいろんな酒蔵にお願いに行き、4社にアプローチをした中で桜顔酒造さんに工場の一部を借りることができました。通常で考えれば、他の酒蔵の人間を中に入れるなんて常識外のことです。しかし、桜顔酒造さんは、「なんでもっと早く来なかった」と快く工場を貸してくれました。

昨年12月15日、当社自慢の酒「浜娘」の新酒ができた時は感慨深いものがありました。するとその頃、桜顔酒造の杜氏さんが軽自動車でやってきた。新酒が出来たことを知らせる「杉玉」を持ってきてくれたんです。うれしかったですね。その気持ちに応えるように私たちは頑張

らねばいけません。

震災以降、自分の中で価値観が少し変化した気がします。それまで欲しいと思っていたものへの執着心はなくなりました。逆にそこにあって当たり前だったものがなんと大切だったか思い知らされた。白分の蔵はないけれど、今白分の出来る環境で精一杯の酒をつくることが大事だと思っています。少し達成が遅れていますが、大槌の方、人ひとりに渡せるお酒をつくるのが目標。浜娘の「ガッツラうまい酒」をこの盛岡で再現したいです。

■陸前高田　俺っ家／陸前高田市で長く愛されてきた居酒屋「俺っ家」。昨年6月に盛岡市本町通り沿に新たな場所を構えてオープンした後も、陸前高田をはじめ沿岸方面から多くの人が足を運び賑わっている。
岩手県盛岡市本町通1丁目16-10　TEL.019-681-0008

気仙代表として盛岡でがんばっていく。

「陸前高田　俺っ家」
店主　熊谷浩昭さん

震災当時は宇都宮にいまして、16Hに高田に戻りました。その状況を見た時にここで再起できるかと思い悩みました。盛岡に来たのは3月20日。商圏はまったくわからなかったけれど知り合いも多くおりましたので、盛岡で再出発を図ることを決めて、とにかく街を歩いて物件を探しました。ひたすら2カ月間自分で歩き、偶然見つけたのがここです。まだ昭和っぽさを残す雰囲気がありましたし長く商売をしていた直感がある（笑）。ここだと決めた場所なら白分を信じてやれます。

6月14日に店をオープンして半年はがむしゃらでしたよ。魚介類の仕入れに心配はありましたが、盛岡市中央卸売市場で思いのほか魚が手に入る。お願いすればいろんな魚を手配してくれるし、少量でも買いやすいですね。

オープン以来、盛岡在住の気仙出身の人はもちろん高田方面から毎日誰かがやってきました。去年までは、一人ひとりが被災した当時のことを話しにきていた感があります。皆、話を聞いてほしくて店にやってきました。そのために始めた店です。少しでも心が和らいでくれるなら嬉しい限りです。でも、少しずつ忙生活が変わってきていますし、訪れる人も前に前に進んでいることを実感しています。開店から家内が店を手伝ってくれています。最初は一人で盛岡に来ようかと思ったけれど、サポートしてくれる人間がいるからできることです。

高田の復興はまだこれから。とはいえ仮設商店街もそろそろオープンし、若い世代が地元で商売をやれるなら白分は盛岡の店で皆を迎え入れていきたい。いつかは地元に戻って店を再開するにしろ、今は気仙代表として、盛岡で頑張っていくつもりです。気仙川のサケを使った紅葉漬けなどは陸前高田ではよく食べている郷土料理ですが、盛岡では珍しいようで、そんな高田ならではの味も広めていきたいと思います。

津波にあって何もなくなったけれど負けないでやっているぞという姿を、この場所で力強く示していきたい。盛岡に旋風を起こすつもりで！。

■次頁、沿岸商工会議所の「震災後」に続きます。

特集

沿岸商工会議所の「震災後」を聞く。

経済復興の核となる事業所の再開。沿岸地域の震災後から現在までの状況について、特に被害の大きかった釜石・宮古・大船渡の各商工会議所から伺いました。

釜石商工会議所

「夕暮れ時、ようやく灯りがあちこちに煌りはじめました。しかし、まだ海岸のほうは真っ暗。つまり、完全には『復旧』されていないということです」。釜石商工会議所の専務理事・和田盛雄さんはかみしめるように話します。

沿岸と一口に言っても、津波による被災状況は様々であり被害の様子も異なります。中心市街地では多くの建物が半壊状態で残りながら、これまで同様の街並みを復旧するのは難しい釜石市。現在は、街中の信号機も徐々に作動しはじめ、木造建造物のガレキの撤去に続き、鉄筋建造物の解体が3月までにほぼ終わる予定とのこと。

「釜石は震災直後から、他地域に比べ復興が遅れていると言われてきました。それは建物の解体が進まず更地が少なかったから。しかし、とにかく生活再開を！というのが第一であり、仮設住宅周辺での仮設飲食店や店舗は早々と再開していました。建物の解体が終われば気持ちに区切りもつくし、復興に向かえるのでは」。和田さんの言葉からは、一歩ずつ明日へ向かう気持ちが垣間見えます。

仮設店舗や事務所は、8月26日に天神地区に完成し15事業所が入居。現在は市内13カ所に用地を確保し、169事業所が事業を再開しています。公有地を探すのに時間を要したものの住宅周辺に商店街を設置し、日常生活が不自由なくできる状況になりました。釜石駅からほど近い鈴子地区は最も規模が大きく48事業所が入居しています。

釜石商工会議所の会員は全部で1046事業所、そのうち674事業所が被災しており、直接調査できたのは547事業所。既にその70%にあたる300社以上が事業を再開しているとのこと。沿岸方面で被災した企業の影響は、取引先である市内内陸部に位置する企業にも及んでおり、沿岸地域の早期事業再開が求められます。釜石商工会議所も2階まで浸水し事務所が完全に水没したため、現在は仮事務所で事業を行っています。3月末には被災したその会議所会館も改修が終わり戻る予定とのことです。

「やはりもとの商店街に皆を呼び戻したい。しかし閑散とした状態では誰も戻ってきません。だからこそ、我々のような立場の者が先に戻って皆を受け入れなくては。街全体の復興に向けて行政の計画も進んでいますが、それを待ってばかりではいけない。商店街としてもう一度スタートしたいと思います」と和田さん。

事業所再開のめどが立たない会員も多いなか、同会議所は先駆けて昨年10月から商工会館の改修工事に着手。釜石市初となる大型ショッピングセンター誘致に期待を込め、地元商店の早期復興を牽引するべく動いています。

内陸部のビル一室で事業を再開した。

釜石の観光名物「呑兵衛横丁」も仮設店舗で復活。

専務理事の和田盛雄さん。

全国各地から支援の募金や応援メッセージを受け取った。

3月18日、改修工事を終えた会議所会館に再び戻り、商店街の復興支援に動き出す。

宮古商工会議所

宮古商工会議所では、会員事業所1299社のうち797事業所が被災しましたが、既に84・8%（676事業所）が再開しています。この状況について会頭の花坂康太郎さんはこう話します。

「事業を再開していますが、本格的復興にはまだ至っていない。復旧に向けた土木建設関係で雇用創出などの経済効果はあっても一時的なものです。ガレキ撤去に伴って道路整備も進んでいますが、本来道路と街づくりは平行して徐々に出来あがっていくもの。しかし、道路だけが先で街がついていかない現実があります。震災直後にできた補助金制度も現実的に利用しにくい点があります。それは現場から具体的な要望をあげて改善していくしかありません」。

行政が行う復興計画を有効的に進めるため、できるだけ現地を見てもらうことが大事であると、宮古商工会議所では被災地視察対応も積極的に行っています。

「財政当局が直接事業者に補助金を出すシステムは実に画期的なこと。しかし街全体が津波にあって用地がないところでは資金をうまく活用できない。そこにミスマッチもありますが国の制度自体はありがたい。会議所は事業者の声を聞き、国や県などの行政、各経済団体などに要望を伝えていく役目があります」。そう話すのは、専務理事の廣田司朗さん。事業者の要望を聞きながらより補助金を活用しやすいしくみを行政に提案していくことも商工会議所の役割です。旧老地区仮設商店街「たろちゃんハウス」は仮設住宅407戸の要望を受けてはじまったものです。運営面を考慮し県内でいち早く、協同組合として仮設商店街をスタートさせています。

「まずは、会頭、私、担当職員、さらに許認可を出す県と土地提供をする市の責任者も打ち合わせに同席し会議所だけでなく行政も協力するというスタンスで臨みました。商店街運営の効率化や補助金活用、低コストの商店街立ち上げを考えると組合方式が有効でした」と廣田さん。

市内商店街では震災後に前から予定していたプレミアム商品券の発行事業や復興イベントを開催し経済の循環に少しずつ動き出しています。また日本商工会議所が全国商工会議所のネットワークを活用し、遊休機械を被災事業所へ無償提供するマッチング事業では、12月に第1回目が行われ7事業所に28台の機械を入れ、現在3事業所にて稼働。今後も事業継続されます。

「50年以上積み上げてできた宮古の街を、数年で元に戻すのは大変なこと。心の救いは地元に残りたいという高校生たちがいることです。彼らが地元で生活していくために働く場をつくる。それが私たちの役割です」。そう花坂さんは話します。

「たろちゃんハウス」は協同組合として運営することで共有備品の購入も円滑化、国の補助事業も活用できた。

会頭の花坂康太郎さん。

「広報みやこ」から抜粋した宮古の被災記録写真集。伝えることも大事なこと。

専務理事の廣田司朗さん。

大船渡商工会議所

海に近い場所にあった大船渡商工会議所は、2階まで浸水し建物が大きく損傷。現在は仮事務所で業務を行っています。震災直後は、津波警報が解除された3月16日から職員を招集、市街周辺を徒歩で巡回し、被害状況の情報収集や対応策の協議を続けました。

「何より大変だったのは情報収集と伝達が思うようにできないことでした。ガレキで道路が通れない。車もガソリンもない。通信が途絶えてラジオだけが唯一の情報源でしたが、避難所情報は流れても周囲の状況がいったいどうなっているのか全くわからなかった」。

事務局長の新沼邦夫さんは1年前をこう振り返ります。まずはいち早く相談窓口を設けるべく、同月24日に職業安定所近隣に屋外テントを張って、会員事業所の相談業務を開始。税務関係、労働関係、支援関係等担当を振り分けて対応しました。同時に仮事務所設置の準備も進め、4月4日には「サンリア」の一部を借りて会議所業務を再開、本格的な相談体制を整えました。テントで応対した延べ11日間で、226件もの相談があったそうです。

「移転後は支所に残っていた名簿を頼りに、職員が会員事業所を巡回。会員の安否確認や被害状況を日視し1044事業所の被災を確認しましたが、連絡手段がなく所在確認できない事業者もありました。4月に開催を予定していた個別相談会も告知手段がないため、大船渡市のマスコミ記者発表を利用した広報、避難所への掲示などで周知しました。目で見て、耳で聞き、口で伝える。通信手段がない環境では最終的にアナログ的な伝達方法しかありませんでした」。

8月28日、市内避難所の完全閉鎖後、会議所ではもう一度1786社を対象に被災状況調査を実施。資金繰りや将来に対する不安、事業再開に向けた土地の問題など課題が山積みの中で、昨年12月には仮設商店街もオープンし、全国各地から遊休機械の提供を受け会員企業への支援が始まっています。

「街の復興は始まったばかり。今までは点の復旧だったけれど、今後はそれを線、面へとつなげていかなくては。一方で自然災害はいつどこでも起きることを忘れてはいけない」。

未曽有の震災を経験した今、情報共有、水・食料・燃料等の備蓄、データのバックアップ体制、災害協定の必要性などさまざまなことを痛感したと新沼さん。今回県内の会議所がいち早く担当を決めて沿岸をバックアップしてくれたことの感謝と共に、災害発生時に業務継続できるようBCP（事業継続の計画）の重要性を強く説きます。

取材／「SANSA」企画編集委員会

数々の支援に対する感謝を語る事務局長の新沼邦夫さん。

新しくはじまった「おおふなと夢商店街」。

今日の食材を買う。当たりまえの光景がやっと戻った。

現在の会議所会館。津波を受けて2階まで浸かり、書類やデータ、資材や備品の一切を失った。

他県からの支援やボランティアが大きな助けになった。

釜石市街地

漁船も流れ込んだ宮古市街地

大船渡商工会議所

大船渡市街地

沿岸商工会議所の被災状況

No	調査項目	釜石商工会議所	宮古商工会議所	大船渡商工会議所	久慈商工会議所
1	震災前の会員数	1,046	1,299	1,812	911
2	調査対象数	1,046	1,299	1,786	911

※パーセンテージは調査対象に対する割合

3	被災事業所数	674 (64.4%)	797 (61.4%)	1,177 (78.8%)	83 (9.1%)
4	内 全壊	395 (37.8%)	341 (26.3%)	768 (51.4%)	17 (1.9%)
5	半壊	19 (1.8%)	199 (15.3%)	136 (9.1%)	49 (5.4%)
6	一部・浸水・その他	260 (24.8%)	77 (5.9%)	239 (16.0%)	17 (1.9%)
7	事業所以外の被害		180 (13.9%)		
8	記入なし			34 (2.3%)	

※パーセンテージは合計に対する割合

9	再開(予定含)事業者数	383 (56.8%)	676 (84.8%)	1,019 (85.8%)	81 (97.6%)
10	再開に向けて検討中			73 (6.1%)	
11	再開したいが目途が立たず	27 (4.0%)			
12	廃業(予定含)事業者数	66 (9.8%)	78 (9.8%)	96 (8.1%)	
13	休業	20 (3.0%)	43 (5.4%)		
14	未定	29 (4.3%)			2 (2.4%)
15	その他(無回答含)	22 (3.3%)			
16	行先不明	127 (18.8%)			
	合計	674 (100.0%)	797 (100.0%)	1,188 (100.0%)	83 (100.0%)

H24.2.20現在　岩手県商工会議所連合会調べ

※各商工会議所ごとの基準による調査結果となっています。
※大船渡商工会議所の数値は、調査回収数1,493社を対象としています。
※大船渡商工会議所の被災事業所数と合計数が一致していないのは、No.9.10.12の複数回答によるものです。

元持会頭に東日本大震災から1年を迎える今の想いを伺いました。

今まで体験したこともない地震と津波の様子をテレビで見たときは、中学2年生まで釜石で暮らしていたこともあり、とても心が痛みました。

沿岸地区の当社社員はみな無事でしたが、未だに家族が見つかっていない社員もいます。立ち直れずにいる人達もまだまだ多いように思います。

震災後は、盛岡でも停滞ムードが漂っていました。盛岡から元気を発信することが沿岸地区を元気にすることだと考え、会議所事業を進めてきました。その中で、昨年のさんさ踊りの観客数が、震災後にもかかわらず増えたこと、被災者の方々を招待してお祭りを見ていただき、元気が出たとのお言葉をいただいた時はうれしく思いました。

今年は4月からいわてDCもはじまり、5月には盛岡で東北六魂祭も開催されます。多くの方に来県いただき、盛岡のみならず、沿岸にも回っていただき、現状を知っていただく機会になればと考えております。

復興元年の今年、沿岸を応援するため「地産地消」に取り組むことが必要です。私の仕事を通してあった出来事ですが、全国のタイヤメーカーの集まりでは参加者全員に「岩谷堂羊羹」が配られたり、飛行機の中では、乗客に「鵡の玉子」のサービス提供があったりと、岩手県民としてうれしく感じました。温泉の客室には、地元でつくられたお茶菓子が置いてありますが、県外からのお客さんも多いゴルフ場やレンタカーの受付などに、ちょっとした県産土産品を置けば、いい宣伝になるのではないでしょうか。

岩手県にはいい物がたくさんあります。岩手の人は宣伝が下手だと言われますが、そういったちょっとした心遣いが土産品の販促につながると思いますし、県外からのお客様への商品PRにつながるのではないかと思います。

被災地の復旧、復興にはまだまだ長い年月が必要です。商工会議所としても平成24年度は「復興支援」を柱に取り組んで参ります。

会員の皆様は、引き続き会議所事業にご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。